

百度(バイドウ)、グーグルとインターネットの公益性

陳言



「日中デジタルウォッチ」の冒頭、まず筆者である陳言の自己紹介をさせていただきます。

私は、名前の後ろに「5931*1」という数字を書くのが好きです。なぜこの組合せが好きかというと、読者が中国語と日本語を持つ特徴を思い浮かべられるからです。私は、1982年大学卒業後、中国で日本語翻訳を行い、日本に留学し教鞭をとり、更に帰国後は記者として企業家として活動をしながら、以来日中経済交流の第一線におります。本コラムは主に日中のデジタルビジネス交流の経営者、関係者を対象としていますから、内容も日中デジタルビジネスの現場により近いものにし、少しでも皆様のご参考になればと思っています。

* 1:日本語では「コクサイ(国際)」となるが、中国語では「59 年生まれの人」と思われやすい。

まずは、最近特に議論になっているインターネットの公益性の問題について書きたいと思います。

2019年の仕事始め1月2日の午前百度CEOである李彦宏氏は、百度全社員に向けて社内メールで、会社の2018年売上が1000億元(約1兆6000億円)を突破したことを発表しました。グーグルの2017年の売上は、およそ12兆4340億円。2018年の数字はまだわかりませんが、おそらく16兆円前後と思われる。言い方を変えれば百度の10倍くらいでしょうか。

2010年3月23日、グーグルはインターネット検索エンジンサービスにおいて中国市場から撤退することを宣言し、市場まるごとほぼ諸手を挙げて新鋭であった百度に明け渡しました。中国市場には搜狗、360、Bing等の検索エンジンはあるものの、基本的には中国のインターネット検索は百度一強であり、これによって百度には大きな発展のチャンスに恵まれたのです。

百度は、年間市場規模数千億元の飛躍的な発展を遂げましたが、百度の提供するサービスについて中国のネットユーザーからの不満の声は少なくありません。2019年に入り、中国のインターネット上で「百度の検索エンジンは死んだ」という書き込みが話題となっており、これは今日の百度には改善すべきところが少なくないことを表しています。2014年の魏則西事件が百度のイメージを大幅にダウンさせたように、今年も百度について同じような疑問を呈する書き込みが後を絶ちません。

* 魏則西事件: 悪性がんに冒された大学生の魏則西さんが、このがん治療の百度検索で上位表示(1位)だった病院で高額ながん治療を受けたが、この病院の治療効果説明(広告)は虚偽であり、魏則西さんが亡くなってしまった事件。ネット検索の信頼性等について社会問題となった。

李彦宏氏は1月2日の一般向けメッセージの中で「19年前、百度を北京の中関村で立ち上げた時、私たちの目標ははっきりとしていた。つまり、ユーザーが本当に使いやすいと思う検索エンジンを作ることであった。」と語っていますが、残念なことに今日の百度は李CEOが求めた目標とはかなりかけ離れたものとなっています。

商業化の重圧で、会社の経営は極端に広告収入に偏っています。企業からお金をもらっては、検索順位を上げざるを得ないのでしょう。検索結果の品質を保证することの重要性は、企業の検索順位を上げることに比べ低くなりました。加えて百度もニュース閲覧からのトラフィック量を重視するようになり、より外のサイトに流れなくなり、自社のことだけを考えるようになりました。

インターネット企業も収益が重視されるようになり、特にリアルタイムで繰り広げられるグローバル競争において、大きな売上と高い利益率を得ることは、製造業よりもより切迫しています。しかし、インターネット企業には、公益性をより強調することが求められ、利益よりも公益性を優先すべきであると考えます。

百度の公益性がグーグルを上回り、中国のネットユーザーに信頼できる情報を提供し、高いクオリティの検索結果が提供できたとしたら、百度での検索は本当の意味で今後グーグルを超えることができるでしょう。残念なことに、今の百度はそこまで達していません。もし、いつか中国に百度で検索するよりも信頼できる検索エンジンが出現したら、真の発展が生まれるかもしれません。現在、搜狗、360 や Bing の検索は百度に比べ公益性が高くありません。百度が公益性の問題を考えなければならぬような必要に迫られてはいませんが、いつかの日か本当にそのような企業が登場したら、今の百度の地位を揺るがすものになるかもしれません。

(北京先益科技有限公司総経理 陳言)